

EVENT

10.26~  
(Fri)

「リスン」でのインセンスプロダクト展より、イルカ・スッパネン作品



SECCOのキーボード再利用キーホルダー

## COCON 烏丸×フィンランド2007

### 実は共通点がいろいろあった、 京都と北欧・フィンランド。

日本の古都・京都と、北欧のフィンランド…。一見、正反対な二つの場所だが、実は共通点はたくさんある。まず、洗練された大都会というよりもゆったりとした時間、自然の素材と向き合う匠の技、暮らしに「デザイン」「彩り」を添えるゆとり。この京都とフィンランドを結ぶイベントが、COCON烏丸で開催される。

内容は、まずフィンランドのリサイクルブランド「SECCO」の期間限定ショップ。タイヤチューブからバッグを、配線基盤からアクセサリを生み出すお洒落なエコわざグッズが、ずらりお目見え＆販売される。「リスン」

ではフィンランドの7組のデザイナーがインセンスプロダクトを競作する展覧会が。フィンランドのデザイン関係者によるレクチャーや関連展示も「シンピ」で開催。そして、「京都シネマ」では『かもめ食堂』のリバイバル上映、アキ・カウリスマキ作品の上映も予定。「アクタス」では北欧アイテムの特集、「スーホルムカフェ+ダイニング」では限定・北欧メニューも登場するというから、全館あげて本気でフィンランド。盛りだくさんですよ。

(沢田眉香子)

- 「COCON烏丸×フィンランド2007」
- COCON烏丸
- 2007.10.26 (Fri) ~11.11 (Sun)
- 075-352-3800
- ※映画上映など一部有料イベントあり

# 街場の

肩の力を抜いて、自由に語ろう…、  
京の街と付き合うということ。

# 演算

袖園保之

【第二回】  
本当の京都という  
回答は無いことを、  
京都の街は知っている。

京都検定なるものに関わるイベントの仕事をしていてふと思ったのだが、京都駅や京都タワーがどうなっている…なんてことは、歴史や文化とは関係が無く(と思っ)ていて、京都オタクな日本人にとっては興味の対象にない。

しかし、本誌はそれが気になってしょうがないわけで、それは確信的に京都駅まわりがある種の京都という街の雑多さを象徴する場所であることを観光ガイドや歴史読本からではなく、身体で分かっているからだ。

そこには「二見さんお断り」も「いけず」もないが、意外にケチな(というかドケチな)京都人が大好きな「そこそこ」の店が多いし、またメニューを見てではなく、自由度の高いコミュニケーションをもってオーダーするという街的なやりとりを、観光客であれ京都人であれ愉しめる(？)店がぎょうさんある(ま、客側も店側もそれなりにわがままであり、裏腹にそれを聞いてくれる洒落さなのかもしれないが…)。

今回の特集では定番(もはや街場の老舗)すぎで紹介はしていないが、右に語ったような京都駅

# 狩野永徳

## 桃山のゼネコン「狩野派」四代目、 狩野永徳初のソロ・エキシビジョン。

国宝「繪回屏風」東京国立博物館蔵



「こないだ、寺で見た襖絵、偉い画家の作っていわれたけど…狩野ナントカっていったっけ…?」。覚えられないのも無理はない。歴史上活躍した「狩野ナントカ」は何人もいる。昔、インテリアの決め手といえば襖や壁の絵。城・寺・屋敷が建設されると、必要になる絵の点数、大きさをたるとも一人の絵師の手に負えない。血縁関係を中心に一大派閥を形成し室町時代から幕末まで約400年もの間、その御用を担っていた。今で言うゼネコンが「狩野ナントカ」つまり狩野派の画家たちだった。

狩野永徳は狩野派の創始者・正信から数えて四代目。織田信長・秀吉に愛され、安土城、大阪城、聚楽第、御所などの大事業を一手にまかされた。その「天下人好み」の画風はエネルギーで大胆。

「はんなり」が「日本画」イメージだと思ってる方、狩野ナントカの中でも群を抜く個性派・永徳をごらんあれ。(沢田眉香子)

■「狩野永徳」■ 京都国立博物館  
■ 10.16 (Tue) ~ 11.18 (Sun) ■ 一般当日1400円  
■ 050-5542-8600 (ハローダイヤル) <http://eitoku.exh.jp/>

ART

10.16~  
(Tue)

## 時の流れ IN FOREST

～音と光のほどよい刺激空間創造～

## 時空も、生死さえも内包する森の力、 名刹でその摂理を、光をもって悟る。

EVENT

10.27~  
(Sat)



「火の玉」の正体は、人間のリンが燃えているものなんだとか。説の真贋はさておき、静謐な場所に浮かぶ光というのは、怖いとか不気味とかを通り越して幻想的である。

「光」「音」「動」の集合体である同イベントを、「新島の寺院ライトアップか?」と言われればそうなのだが、「光」担当の安彦哲男さんは、10年以上も前に高台寺のライトアップを手がけた黎明の人である。

自然の中には生のエネルギーも、死のそれも存在する。オブジェとしての曲線美な光が表現

するのは、「森」という世界の、美しくも厳しい摂理だ。そこでは時間も空間も、生死さえもがよどむことなく移ろい、そして季節という区切りがあるのだと。温度も湿度も、匂いさえもが優しく冬に向かう、季節の中で最も素晴らしい変化を見せる宵の幻想を、幸せと呼ぶはずして何と呼ぶ? 夏好きさんには、ごめんなさいけれど。

(竹中 聡/本誌)

■「時の流れ IN FOREST ~音と光のほどよい刺激空間創造~」■ 高台寺 月見院  
■ 10.27 (Sat) ~ 11.4 (Fri) ■ 拝観料500円  
■ 問い合わせ 075-934-9377 (ビコズネオンアートファクトリー) <http://www.bicoz-neon.com>

まわりの店の代表格は、「山本まんぼ」と「第一旭」だと僕は思う。

まんぼ焼、特製ラーメン：呪文のようなメニューしかない。「大人の京都」に冠のついたような本を山ほど読んでもきつと分らないだろう。これはお茶屋の会計(実際には歳の終わりにどかんとやってくる「請求・明細書」なんだけど)よりもややこしいと思う。

そこで突き放されたら「いけず」もいいところなんだけれど、どんな常連客でもかまわず「飲みもんはケースの中、自動販売機と同じ値段。水はセルフサービス」写真のお好み焼きがまんぼ焼き、おそばかうどんか、2人やつらだいたいみんな「こずつしはる」とか、「大が特製、麺の堅さは言うてね」といったお節介に近い補助的説明とともに、身体的に「これにしとき」というメッセージがそこに含まれているという、話し(京都弁を讀む術も教えてくれる)これを「いけず」と言ってしまうたら、身も蓋もない。

この2軒が塩小路にあり、タカバシを挟んで向かい合っているというのも意味深である。そう、これまた「大人の京都」で勉強できる鯖街道でなく、「塩」小路なのであり、それが現代の洛中・洛外を規定すると言われるJR京都線をまたぐ「タカバシ」にあるわけなのである。

でも「本当の京都という回答は無い」ことを、京都の街は知っている。そして京都人はキリのない賢沢Ⅱ雅も、そこそこに愉しむ術も知っている。

だから「心配なく」「まんぼ山本」の具材を全て答えよや、「第一旭」の赤身・白身とは? 野菜多い目と葱多い目の違いは?」なんて質問は、京都検定に出てこないから。

袖田保之(06年、京阪神エムマガジン社を離れフリーに、17年間離れていた京都へ戻って京都CFIを中心に店ネタから人、街コラムを執筆。この7月には、三条堀川西入ル三条会商店街内に編集フロクンション「らぶらぶ」を設立。